

❖4題目は、精神科医療と介護の連携に関する調査研究の成果報告である。ケアマネの多くが、医療的側面のアセスメント不足や主治医との連携不足を指摘している。一部の地域では、地域包括支援センターにPSWを配置したり、精神科医療との連携を仕組みとして整備しているところもあるが、多くは個別事例を通じての連携のみに留まっている。今後、高齢福祉の分野にも、PSWの活躍の場を広げていくためには、さらなる資質の向上が望まれる。

❖5題目は、南部病院における緩和ケアの実践報告である。緩和ケアとは、がん患者やその家族の身体や心のつらさを和らげて、患者と家族が「その人らしく」過ごせるように治療や療養の場面のみならず日常生活のさまざまな場をサポートするものである。発表者は、緩和ケアチームに配属になったとき、「PSWの出る幕はないのではないかと」疑問をもつ。しかし、日々実践を重ねるうちに、今までの実践とオーバーラップする場面が多いことに気づく。PSWの守備範囲の広さを感じさせてくれる発表であった。

❖6題目は、インテーク面接を通じた「家族支援における精神保健福祉士の役割」についての実践報告である。長谷川病院では、インテーク面接を行う専門のPSWを配置し、早期に可能な限り多くの情報を得るようにしている。「力動的チーム医療の実践（病院の基本方針）」のためには、「家族も治療チームの一員である」と認識してもらうことが重要である。しかし、入院直後は、さまざまな問題を抱えている家族が多い。したがって、PSWが一方的に情報収集し説明するだけでなく、インテークの段階から、家族の感情を理解し、少しでも不安感を軽減するようなかかわりを心がけることが大切であると、発表者は強調する。

❖全体の感想として、高齢精神障害者の地域移行、地域生活支援が協会事業として取り上げられ、議論されていた。この実践報告を会員が共有することで、新たな支援の視点ができてきたのではないと思う。

#### 分科会 1-④ 雇用および就労に関する支援

##### 【実践報告】

### IPSの特徴を活かした就労支援の実践

～ストレングスマデルにおける就労支援の葛藤に関する一考察～

○小野 彩香・高橋 由佳・坂上 友恵・越後 重貴・田口 雄太 Switch

#### ■ はじめに

特定非営利活動法人Switch（以下、スイッチ）は、「心のつまづき」があって通院している方へ、就学・就労支援を実施している。法人の活動理念として「Individual Placement and Support」（以下、IPS）を取り入れており、そのなかでも即時性、興味関心に基づく本人主体の支援を心がけている。

#### ■ 目的

強迫症状が強い方が、専門的な職業に再就職する事例がある。再就職しても、極度の緊張等から強迫症状や混乱が出現し、就労を継続する上でかなりの精神的負担が見受けられる。しかし、一方で、充実感も高く、疾患がありながらも諦めていた仕事に就けた喜びを手放したくないという気持ちも強い。その経過には支援者も葛藤をもつ。葛藤と支援について、事例をもとに検討したい。

#### ■ 事例紹介

A氏。20代女性。病名：統合失調症。強迫観念が強い。看護学生時代に発症。看護師として就職したが、悪化し退職。療養後にスイッチを利用。看護師の仕事を再希望したため、スイッチより職場開拓し看護補助として週3回4時間の採用となった。8カ月継続したが症状悪化のため、4カ月休職となる。その後、復職している。

#### ■ 支援内容と葛藤

就職活動中にも混乱や強迫観念が強く出ることがあったが、自分の症状に自己対処できるようになることを支援し、効果が出ていた。ジョブコーチ支援も入り、職場も大変理解の高い環境である。しかし、本人にとっては、次々と強迫症状がでて、常に苦しむ状況があった。きちんとやらなければ命にかかわるという緊張と不安が強くなりすぎて、動けなくなってしまう。例えば「自分の食事介助のペースが早かったから誤嚥したのかもしれない」となってしまう。その本人の苦しさを聴き、対処方法や優先順位を整理する支援をしている。しかし支援者側には「こんなに頑張らせてよいのか、本当にこのマッチングは適切だったのか」という葛藤があった。「十分頑張ったから終わりにしよう」と誰かが言ってあげれば楽になるのではないかと思った。その葛藤があるなか、本人より「こんな苦しい思いまでして、なんで働かなければいけないのか」と打ち明けられる機会があった。私は、同じ思いをもっていたことを率直に伝え、本当にどうしていくことがA氏にとって良いのか悩んでいることを話した。その後、医師を交え3人で共有し、「辞めることも前向きな選択肢に置きながら、今は休息に努める」と一致した。その後、良い休息がとれると復職するという流れを繰り返している。

#### ■ まとめ、考察

ストレングスマデルでは、興味関心、強みを活かした仕事へのマッチングが重視される。そのなかで、専門職としての資格や経歴は、企業にとっても戦力として雇用検討しやすく、採用につながりやすい。本人も頑張ってきたことが認めてもらえたと、大きく自己肯定される。

その一方で、本事例のように苦しみを生む結果にもなる。A氏は、看護師として働けることを夢みたいと泣いて喜んだ。実際にみるその接遇も素晴らしい。しかし、その場にいるだけで引き金になるのも事実である。本人

が希望するなら、医師がストップをかけない限り、支援者は寄り添うことが支援であるのか、葛藤していた。その整理のきっかけをくれたのは、本人の打ち明けであった。自らこんな苦しい思いをしてまで頑張る意味があるのかと発してくれたことで、支援者自身も自己開示できた。そこから、「この就労と向き合う意味を探していく」ということが共有された。

私は、これからも利用者が自分の生き方を主体的に選択していけるように、かかわりを恐れずに向き合っていきたい。IPSが自分のリカバリーを追求する方法として有効であるならば、きっと、本人が経験している今の苦しみも、その過程にあるものであると信じている。

※事例等の使用は2013（平成25）年1月に対象者の承諾を口頭で得ている。